

Bunkyo New Zealand Exchange

New Zealand との交流について

木名瀬 信也

1. 海外交流企画の誕生まで

現在海外交流部が中心となって、すすめている New Zealand との交流の源流は、本短大に 8 年余り勤務し、今は Auckland で N.Z. 外務省の liaison Officer の職にある Miss Stephanie Griffiths にある。帰国が迫って来た或る日、旗の台の校舎の一室で、近い将来 NZ との交流企画を立てようと、真剣に話し合ったことを思い出す。

彼女の帰国後、具体的な計画を作るために、NZ 大使館観光局に Mr David Linch を尋ね、さらに NZ 航空の支社長に会い、私の交流計画の意図を述べた。NZ 航空の山崎課長がかねてから、要請されていた件を知った。New Plymouth の Public Relations Officer の Mr Bryce McPherson が、旅行グループを日本から呼びたいということであった。New Plymouth は NZ 観光のメインルートから外れており、職務上からも是非日本からの旅行者を誘致しようと、熱心な手紙を再三東京に送っていた。山崎課長の説明を検討した結果、New Plymouth は候補地として有望なことがわかった。Mt Egmont の裾野に広がる Taranaki 地方の中心都市で、farm stay の受け入れも期待できるところである。

文教の学生を受け入れてもらうためには、先ず女子高校を選び、その生徒の家庭に stay することがよいとの結論に達した。New Plymouth には Girls' High School があることも分った。大学生になると、多くが独立して両親の家を離れて暮らすのは、日本の場合と同様である。文化の基礎には生活があり、生活は家庭にあることを思い、高校生の家庭こそ NZ の生活様式に触れ、異文化の根本的な様相を知る最良の場である

と理解した。文教の学生の会話能力は、一般的にはすぐれているとは言えず、NZ 生徒との年齢差は、かえって文教の学生に安心感を抱かせることになる。

旅行実施の時期は、入試終了時と卒業式との間の3週間とすることにした。卒業年次学生には、思い出を残す機会となるであろうし、2月初旬から4月初めまで、在校生に対する学校側の企画が無いのは、在校生に気の毒であるとの考えも浮んだ。さらに北半球と南半球との季節の違いが、この時期をいっそう歓迎させることにもなる。

このような配慮の下で、小尾学長の視察がなされることになった、そして私が同行した。昭和57年1月2日(土)同行二人、NZ 航空 TE24は20.55成田を発ってNZへ向った。翌3日(日)13.25 Aucklandに到着、Stephanie Griffithsの出迎えを受け、初めてのNZ旅行に彼女の同行を依頼し、同日17.05国内線NZ985機でNew Plymouthに向い、18.00無事最初の目的地に着いた。サマータイムの関係で、実際は夏の17.00明るい日差しの中で、大きく息を吸い込んだ学長は、即座に「ここはいい」と判定を下された。New Plymouthの空港に出迎えてくれたのはNew PlymouthのPublic Relations Officer Mr Bryce McPhersonとAir New Zealandの当地の責任者Mr Greigであった。

Devon Motor Lodgeに宿をとり、翌日4日(月)はTaranaki連合協議会の会長でStratfordの市長でもあるMr Carrington主催の歓迎会に出席、次いでNew Plymouth Girls' High Schoolを訪問し、Mrs Bruning校長に校内を案内してもらったが、学長は一目でこの校長の人柄が気に入られたようであった。1月の初めは夏休みの最中であり、ポフッカワの赤い花が咲いていた。引き続きLeuthurt氏の家庭に案内され、小じんまりとした質素な家であったが、その前面に展開する牧場は35万坪に相当すると言ひ、しかも中程度の大きさと聞いて驚嘆した。Kiwi fruitの棚やリングの果樹園、また退役陸軍士官の優雅な生活ぶりも、見せても

らい、NZの余裕ある豊かな生活が、羨やましく、日本の現状と比較された。

この4日の夕刻、昨日の便と同じNZ985で、前記 Mr McPherson や Mr Greig に見送られて、同行三人は Wellington へ向った。James Cook Hotel で一泊し、翌日午前中 Stephanie の案内で、教育省と外務省を訪問し、13.05 NZ916で Rotorua へ飛び、一泊の後 Auckland に戻った。そして1月7日(木)はNZの海外交流にとって記念すべき日となった。協定書のような形式的なものは何もないが、元駐日大使 Mr Hunter Wade と小尾学長との間で、BUNKYO-NEWZEALAND EXCHANGE SCHEME の発足の合意があった。NZ側では Stephanie Griffiths が日本側では木名瀬が、企画進行の衝に当ることになり、早速具体的な内容の検討に入った。

New Plymouth Girls' High School で1週間、Auckland では文教の学生が小人数に分れて、4ないし5校の世話になり、その生徒の家庭に1週間 stay することとし、Auckland の高校の選択は Stephanie Griffiths が責任を以って行なうことが決った。3週間の中、残りの1週間は移動と、観光に費やすこととし、Waitomo Cave 見物や Rotorua 滞在が加えられることになった。海外交流の夢の実現に向けて、話は弾んだが、最も重要な参加人員の確認は全く出来ない状況であった。Stephanie はこの頃外務省採用試験合格の通知を受け、Wellington へ研修に行くことになり、学長と私は1月8日(金)09.30 TE23で Auckland 発 Fiji のNadi に向った。Fiji の Regent Hotel は南の島のリゾートホテルらしく、1週間の慌しい旅の終りに、しばしの憩いをもたらしたが、私には強烈な思い出が、いつまでも尾を引くことになった。海の微風を受けながら、ホテルのレストランで、さまざまな雑談が続いた後で、学長は「君は馬鹿だなあ、やらなくても良いものを、何でするんだ。うまく行ってあたりまえ、失敗したらその責任をどうとるんだ」「なぜこんな企画をやる気に

なったんだ」私の答えは「タイミングです。」

私の気持の中には、自然に醸成されて来たとの思いと、新たな発展を求めるには、この時期がよかろうとの意識的な思慮とが、混合していたように思う。この会話の最後に、学長の言われた言葉は「その馬鹿が今は必要なんだ。」私は無言で「よし、その馬鹿になろう」と心に決めた。学長は見事な殺し文句で、私を縛りつけてしまわれた。

大それた想像を許してもらえれば、勝海舟と西郷隆盛とが、江戸城明け渡しの談判を行なった時、勝海舟には、Earnest Satow や Parks 公使に手を打っていたとはいえ、きっと西郷の心をゆさぶった殺し文句があったのではないかと、思わずにはいられない。

この決定的な言葉で、この視察旅行は終り、Nadi 発01.10成田着06.55の最終日程は、第1回海外交流探求の旅の実施に向けて、具体的な手順の検討に費やされることになった。

2. NZ 海外交流の旅の実施

第1回 NZ 海外交流探求の旅、と名付けられたこの旅行企画に果して何名の学生が参加するか、実施可能な学生数を確保しなければならない。そのためには、日程と費用を決定する必要がある。幸いにも、視察旅行の手配を依頼した、全日空ワールド(株)が旅行の実施に当たってくれることになった。

日程は2月27日(土)出発3月19日帰着で、Air New Zealand の747ジャンボ機で飛ぶことになった。費用は1人当り48万円。1月9日に帰京して、募集を始め、1か月半で出発という、あわただしさであった。学生の参加募集は順調に運び、24名と2名の同行者が、予定計画に随って、海外交流探求の旅に出発することになった。24名の学生は短大生の他に、教育学部の4年次生も含んでいる。海外交流企画の発展の命運は、第1回の旅行の成否にかかっているとの思いに、緊張で肩が張るほどで

あった。

現在の NZ 旅行企画に対比して、第 1 回の交流の旅を考えて見ると、最初はいろいろと改良を加えるべき点のあったことがわかる。日程細目を検討して見ることにする。期間は 3 週間で変化はないが、到着后直ちに 3 泊のホームステイを Auckland で行ない、New Plymouth は 7 泊、Fiji に 2 泊、9 泊をホテルで過ごしている。Auckland 3 泊は期間が短か過ぎて、host family と親しくなる時間的余裕がない。Fiji は旅行の最後を飾るよい場所であろうと考えたが、見込み違いであった。雨が多かつたせいもあるが、NZ の人々と交流を求めに来た、学生たちにとって余り意味がなかったようである。この反省が第 2 回の NZ 旅行から Fiji を除き、その分だけホームステイ日数を増やすことになった。ホームステイ個所も、New Plymouth を先にし、Auckland を後にしたのは、第 1 回の場合のように、最初と最後を Auckland でホストの人々と会うことになる、どうしても New Plymouth との比較が話題になり勝ちになり、N.P. の人々に失礼になると考えられたからである。この日程の変更は最後の晩を Auckland で、host family と送別会を催すのに好都合となった。

第 1 回の旅行グループの最初の宿は、Auckland の White Heron Regency であったが、その日の夕刻、元駐日大使で小尾学長と交流計画の実施に合意された Mr Hunter Wade が、日本大使館総領事の安藤浩氏と共に、わざわざ挨拶と激励にホテルまで、おいで頂いたことは、記憶されねばならない。この時安藤総領事が真剣に私共に語られたのは、善意と友情を一方向的に期待してはならない、ということであった。「文教・New Zealand 交流計画」が現在何とか成功を収めて来た理由の一つは、安藤総領事の配慮にできるだけ沿うよう努力を重ねて来たことにあると言ってもよいと思う。その具体的な対応の第一は、host family に金銭的な負担を極力かけないようにすることであった。New Plymouth の場

合は金銭的な提供を初めは拒否されたのである。しかし少しでも負担を軽減して欲しいと、こちらから申し入れ、結局学生1人1泊\$10.-の計算で、総額を Public Relations Officer を通じて手渡すことになった。参考資料として Canada の Home Stay 計画を検討したところ \$20.- であった。さて New Plymouth は \$10.- に決めたが、local town と違って Auckland は NZ 第1の大都市であるから、同額というわけにはいかず、結局 \$15.- の線で、すべてを賄うよう Ms Griffiths をお願いした。この據出金とも言うべき額は、使用目的を文教の学生の応待に置いてはいるが、分配使用方法は NZ 側の世話役に一切お任せすることにした。各 host family に分配する学校もあれば、総額をまとめて教育に役立てている学校もあり、第3回以降はその大半が、最後の盛大な送別会に使用されるよう、Ms Griffiths の配慮がなされたようである。

このベースの金額は、その後の情况进行了ら増額され、現在は local town は \$15.- に big city は \$18.- になっている。

安藤総領事の配慮につき、文教の交流計画は、文教の学生が NZ へ旅行することだけでなく、NZ の学生が訪日された時、文教の学生は家庭等を提供して、心よく彼等を迎えて、その親切と、歓待にこたえることを特徴としている。交流という言葉は当然このような対応を含んでいるはずであるが、しばしば見失われがちである。交流は日本の文教の学生と、NZ の若者との交流を意味しているのであるが、その交流の場が、日本人から見て外国になることが多いのではないかと思う。私共は日本の土地も、交流の場として、少なくとも外国の土地と同様に、活用されねばならない。日本で受け入れた交流活動については、後述する。

安藤総領事のご配慮は、十分生かされていると考えるのは、甘すぎるであろうか。

Ms Griffiths が Auckland でホームステイの準備をするに当り、この地域で日本語を教えている高校を5校選び、私共の学生を5分割して各校

に分散させたのは、彼女の配慮の良さを示すものである。日本人学生の集团的行動を、小グループにすることにより、自立的意識を高め、NZ生徒の日本語学級に入って助手的役割をさせることにより、日本語学習の意欲の増進を計ったと見受けられた。日本人学生は英語の習熟を、NZ生徒は Native speaker との接触により、日本語履習の便を得る。これも交流の一側面であるに違いない。Auckland は人口80万で NZ 第1の都会であり、経済活動が最も盛んであるが、日本が経済的に最も重要な国となったという事実が、必然的に日本語学習意欲に拍車をかけることになった。経済的に重要な他の2国、すなわちアメリカとオーストラリアは、言うまでもなく同じ英語を母国語としている便宜さがあり、使用国語の比較により、日本語学習の切迫した必要性が強く意識されているようである。

New Plymouth の Mr McPherson は私共の交流計画の火付け役でもあった人であるが、市の広報課長として並々ならぬ配慮をしてくれた。市長の Tea Paty に招待され、NZ 自治体のシンボルでもある市長のガウンに触れたり、ガウン姿の市長と一緒に写真に納まったりして、日本にはない英国風社会の実体に接して、私共は喜びと驚きを感じていた。さらに彼の配慮は Japan Society の人々を動かし、St. Andrew Church の結婚式に参列することを許してもらった。Japan Society の Secretary である Mr Clearwater の大きな体から溢れんばかりの親切には、私共は皆ひとしく感謝の心を表わしていた。しかし何といても忘れることのできないことは、New Plymouth Girls' High School の校長、Mrs N. Bruning 先生の心温まるご配慮であろう。NZ の新学期は2月の第1週から始まるので、私共が訪問する時期は、いよいよこれから授業に熱が入ろうとする頃である。学期始めの運動会や Mt. Egmont へのハイキングなどを、訪問の時期に合わせて、学生間の交流の促進を計っていただいた。写真で見るとビクトリア女王の姿に似て、でっぶりとしているが、温情

と決断力とを見事に示されて、私共を魅了する女子高校の校長先生に、私は嘗って A Lady of Elegance and Dignity の称号を奉るつもりで、Mr McPherson に話したところ、全く同意見であった。

Auckland においても、New Plymouth においても、お世話になった期間の最後の日を、送別会に当てることにした。送別会は私共の感謝を表すためのものでもあり、host の家族や、高校の先生方をお招きすることにした。大変喜んでいただいたのであるが、牛を飼育している家庭は、夕方 6 時頃は多忙な時であることを教えられ、開始時刻を変更することを余儀なくされたこともあった。さらにホテルで催す送別会は、学生にとって不必要な出費ではないか、との助言をいただき、校内の施設で学生らしいパーティーをするようになった。そこで私共は感謝の気持を別の形で示すことを、考えざるを得なくなったのである。

Auckland における送別会は、数校に分散してホームステイが行なわれたので、各校の先生を始め、各校に関係しているホストが、一堂に会する意味もあって、盛大に催され、Patron 役の Mr Hunter Wade も出席してご挨拶をいただくことにしている。総合司会は申すまでもなく、Ms Stephanie Griffiths である。

海外交流企画が実施に移されて、回を重ねる毎に改良を加え、本年第 6 回の交流の旅の出発を迎えることになったが、参加学生数の変化を見るとその発展状況が明瞭になる。

1982年 2月第 1回	24名
1983年 2月第 2回	28名
1984年 2月第 3回	42名
1985年 3月第 4回	20名(A)21名(B)
1986年 2月第 5回	42名(A)35名(B)
1987年 2月第 6回	28名(A)19名(B)35名(C)

累計 294名

第3回に42名を超えたので、A、B両グループに分割することとし、新たに訪問地として Whangarei と Christchurch とをコンビにして、新コースを設定した。一つの高校で40名以上のホームステイをお願いするには、無理があることがわかったからである。

引受け側の高校の大きさにもよるであろうが、教師の対応も難しくなることが理解できた。第4回は2つのグループに分れたが、それぞれのコースでは、適当な参加人数であったと言えよう。しかし第5回にまた40名を超えることになり、専門学校の参加も認められるようになったので、第6回からは3コースの設定をし、新たに Wellington と Napier を加え、前回の Whangarei と Christchurch を地理的に遠隔地である故に組み換えを行ない前者と後者をそれぞれ組み合わせて、Bコース、Cコースとした。3コースの募集合計数を100として、NZ 海外交流の旅の、数量的な限度としている。

3. 海外交流企画の問題点

文教大学学生を、NZの高校で外国体験をさせることについては、批判もあったようであるが、外国生活の基本的な側面に触れるには、NZ生徒と3才前後の年齢差があっても、障害になるどころか却って期待以上によく作用していたように思う。英会話能力と自力生活のしつけなどの差が、NZ生徒を年齢以上に見せ、逆に日本の学生のすべてに依存し勝ちな傾向が、年齢を下廻って見られるようにさせていたと思う。生活の面で、家庭内の事情が理解できた后で、文化的な側面を知的な年長者と、語り合うことができればよいと期待している。

海外交流企画の説明や、表題から英語研修の文字を除いている。最初の視察旅行の折、現地の英語学校の授業を見学したが、1～2週間の研修による効果に大きな疑問を抱いたのである。短大の英会話の授業以下と言ってもよい、違う点は数日間集中的に学ぶことだけである。日本に

居てできることは日本で十分すればよいであろう。さらに英語を決して頭に冠しなかったのは、英語が不用だからではなく、communicationを行うには、心が先行するものだと理由にもとづくのである。母国語でも communication が上手にできない者に、英語による communication を期待するのは、無理というものである。そして特に若い者にとっては、微笑や、小さな仕草が、言葉以上に有効な communication の切っ掛けを作り、これを促進させることがある。心が通じ合うことの喜びを知ることが、交流の一番大きな目的と言えるかも知れない。この喜びを感じた若者は、進んで外国語の学習に熱を入れ、より大きな喜びを求めることになる。

海外交流が一方的に終ってはならないことは、貿易の場合と同じであろう。相手の世話になることだけを考える者には、交流の問題を考える資格に欠けると言って差し支えないと思う。

すでに1982年8月には Takapuna Grammar School の男女学生を東京地区で、お世話をしたが、半年前の旧交を温めるだけでなく、友情関係がさらに深められた。以後1983年の12月には Westlake Girls' High School の学生が、ドイツ訪問の途中、東京で数日を文教の学生と共に過ごし、Auckland Grammar School や再度訪日の Takapuna、さらに St. Margaret College、昨年8月～9月には Whangarei Girls' High School が来訪され、彼等には諏訪市の諏訪清陵高校や諏訪双葉高校をも紹介し、東京地区のホームステイと同時に、山国の高校生との交流も楽しんでもらうことができた。海外交流は言葉だけでなく、実際の交流を通じてこそ、その喜びを満喫し得るのである。